

「あ、アケビがなっている。」

一人が見つけると、ばらばらっと数人の子どもが、林にとびこんでいきました。

「おうい、学校におくれるぞ。」

という伊策いさくの声も、アケビ取りに夢中になっている仲間にはきこえません。しかたなく、伊策はまだ木登りのできない小さな子どもをさそって、

「さあ、いこう。」

と、戸石川に沿そってくねくねと続く学校への道を急ぎました。

そのころは、学校の勉強よりも仕事の手

